立教大学、2012年11月19日

ポスト世俗主義時代の政教分離

―キリスト教、天皇制を視野に入れて―

同志社大学　小原 克博

http://www.kohara.ac

OVERVIEW

1. はじめに
2. 近代日本の政教分離
3. 天皇とキリスト教――河井道を手がかりに
4. 天皇とアメリカ
5. 戦後の神話
6. 世俗化・世俗主義そしてポスト世俗主義

1．はじめに

- 天皇は「近代」そのもの
  - 天皇は信仰の対象でありながら、社会を「脱魔術化」する役割を果たした。
  - 日本の近代化は「宗教」を排してではなく、「宗教」を媒介として進められた。
  - 近代と近代以前との境界設定。
- ポストモダン、そしてポストセキュラーの「先取り」としての天皇――世界史的な視野の中で

政治神学

- 「主権者とは、**例外状態**（Ausnahmezustand）に関して決断を下す者である。」（カール・シュミット『政治神学』1933年）
  - Sovereign is he who decides on the exception.
- ナショナリズムの位置づけ
  - 信仰と国家の関係――秩序原理への問い

2．近代日本の政教分離

国体イデオロギー

国民道徳と宗教は一体となって機能した。ただし、後者の価値は前者を基準にして計られた。

道徳＝公的領域
国家神道、教育勅語

宗教＝私的領域
仏教、キリスト教等

大日本帝国憲法における天皇

- 第１章　天皇
  - 第１条　大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス
  - 第３条　天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス
  - 第４条　天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ
  - 第１１条　天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス
- ナショナリズムとミリタリズムは天皇を共通基盤としていた。

日本国憲法

- 第１条　天皇は、日本国の**象徴**であり日本国民統合の**象徴**であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。
- 第９条　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
  - ２　前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

３．天皇とキリスト教

- ボナー・フェラーズ（1896-1973）
  - 第二次世界大戦中にはマッカーサー直属の軍事秘書として対日心理作戦を指導し、終戦後には昭和天皇の戦争責任が問われる中、河井 道と一色ゆりの意見を取り入れながら、マッカーサーに天皇訴追を回避するための意見書を提出した。天皇は共産主義に対する防壁になるとも考えた。
- 河井 道（1877-1953）
  - フェラーズが助言を請い、最も信頼した人物。国内外で活躍をした当時の代表的なクリスチャンの一人であり、また恵泉女学園を設立した教育者。

天皇への親愛

- 河井が学校に御真影を掲げることを拒否しながら、同時に天皇の擁護者であるということは、フェラーズには理解しがたかった。（岡本嗣郎『陛下をお救いなさいまし――河井道とボナー・フェラーズ』集英社、2002年、206頁）
- 天皇の統治は神の委託という考え方は、新渡戸稲造の影響による。（同書、232頁）

天皇を受容し、戦後を生きたクリスチャン

- 矢内原忠雄（天皇を平和主義者として理解）、賀川豊彦、滝沢克己、永井 隆（神の摂理としての原爆）
  - 「然るに浦上が屠（ほうむ）られた瞬間始めて神はこれを受け納め給い、人類の詫びをきき、忽ち**天皇陛下に天啓を垂れ**終戦の聖断を下させ給うたのであります。」（永井 隆『長崎の鐘』1949年）

４．天皇とアメリカ

- 吉見「・・・ある程度は民主化しながらも、その外枠に天皇制的な仕組みを残し、維持することが、まあ戦後のアメリカ統治にとっても機能的だし安全だった。そうして天皇がアメリカという**帝国の秩序の一部**でありながら、日本社会における**公共領域**を一面で代補し、社会がそれなりにまとまっていく仕組みができた。」
- テッサ「まさに**天皇とアメリカの相互補完関係**ですね。・・・」（吉見俊哉、テッサ・モーリス・スズキ『天皇とアメリカ』集英社、2010年、168頁）

公共領域

- アメリカと公共領域
- 天皇と公共領域
- 3.11以降に出現した公共性と相互補完関係
  - 天皇による被災地慰問と米軍によるトモダチ作戦

5．戦後の神話

- 象徴天皇制は伝統への回帰
  - 例：津田左右吉、和辻哲郎、中曽根康弘
    （ケネス・ルオフ『国民の天皇――戦後日本の民主主義と天皇制』共同通信社、2003年）
- 平和主義者としての天皇
  - 軍部によってだまされ、犠牲になった天皇という国民的イメージ

6．世俗化・世俗主義 そしてポスト世俗主義

- 世俗化と世俗主義――宗教の公共性・公益性をめぐる問い
- ポスト世俗主義の多様性
  - 西洋：紛争回避の知恵としての世俗主義とその限界の認識
  - イスラーム世界：植民地化の産物としての世俗主義と民主化革命以降の政教関係の変化（流動化）
  - 日本：天皇制の中のポスト世俗主義そして3.11以降

西洋の場合

- 倫理的要請としての世俗主義（政教分離）
- 「世俗主義の主たる動機の一つとして、従来あまりにもしばしば宗教が焚きつけ、正当化してきた残虐性に終止符を打ちたい、との願望があったことは明白である。ここで残虐性とは、他者の生ける身体に対し、この世において、意図的に苦痛を科し、またその精神に苦悩をもたらすことを言う。」（タラル・アサド『世俗の形成――キリスト教、イスラム、近代』みすず書房、2006年、131頁）

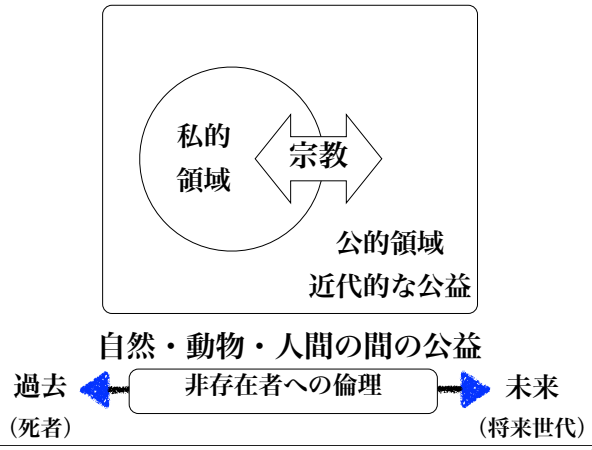
ポスト世俗主義

- 世俗的なものと宗教的なものを対立的にとらえ、両者の間に境界壁を設けるのでなく、むしろ相互に関係づける法的・政治的・政策的な作法を求める。
- 世俗主義（政教分離）によって問題解決できるという近代主義に対する批判。
- 世俗的／宗教的といった概念的二分法への批判。
- 単に宗教が公的領域に復権したことを指して、ポスト世俗主義というのは間違っている。それでは、世俗主義以前の時代への回帰となる。どのように宗教の役割が変化したのかを問わなければならない。

イスラーム世界の場合

- 中東における独裁者は、ほとんどが世俗主義者であった。結果的に、宗教的少数者が保護されていた。
- イスラームが公的領域で力を取り戻しつつある今日、西欧的な世俗主義でもなく、近代以前のイスラーム的理想への回帰でもなく、新しい政教関係が模索されている。

日本の場合

- 近代の構築物としての「宗教」（RELIGION）
  - 私的領域と公的領域の二分法、そして天皇（国体）
  - 西洋セキュラリズムに対抗するポストセキュラーな欲求
  - 「宗教」の原型としてのキリスト教
  - 切り詰められた公共性（宗教性）――失われた次元
- 「近代」とは何であったのか ― 3.11からの問いかけ

３.１１から見える動物・人間関係